

# 通信小海

## 公僕 (こうぼく)

牧師 水草修治

公僕

おおかたの予想に反して、田中康夫氏が県知事に選出された。期待もそして反感も(?)。大きい知事の誕生である。きまじめな長野の県民性からいえば、田中氏の個人生活に関する悪評は気になるところで、それゆえ田中氏が選出されたのは意外であった。池田氏への反発が田中氏を持ち上げたと言いつのが、おそらく真相なのだろう。

池田氏の敗因はなんだったのか。敗戦の弁を聞いて、当の池田氏はそこがどうもわかっていないようだなと思った。氏は繰り返し「私の力不足でした。」と言っていたのである。「力」で県民の票を集めようとしたことに

### 【今月のメッセージ】

「あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。」マルコ一〇:四三

こそ、県民が反発したのだと思うが。醜悪なまでの権力行使によって人々をねじ伏せ、票田を青田買いしようとしたことに県民はノイと言ったのではなかったか。

「公僕」ということばがある。大臣、県知事、市町村長、役場職員、警察官など公務員全般を意味する言葉である。公僕とは、すなわちおおよけのしもべである。その心得とはなにか。主イエスは、次のようにおっしゃった。

「神を恐れぬ者たちの中で支配者と認められた者たちは彼らを支配し、また、偉い人たちは彼らの上に権力をふるいます。」

しかし、あなたがたの間では、そうではありません。あなたがたの間で偉くなりたと思う者は、みなに仕える者になりなさい。あなたがたの間で人の先に立ちたい者は、みなのもべになりなさい。わたしが来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、

日本同盟基督教団 松原湖高原教会 牧師水草修治

牧師館 長野県南佐久郡小海町大字豊里一十六 一

〒三八四一一 三 二六七九二四七七六

郵便振替 五三 六一六八三

黄色い十字架 パロの五十メートル北

ヤナシヨウの向かい

## 集会あんない

日曜日

朝礼拝 午前十時から十一時

夕礼拝 午後七時半から九時半

水曜日

聖書を読む会 午前十時半

祈り会 午後七時半

\*初めての方も歓迎します。

\*個人的相談にも乗ります。

また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。」

(マルコ一〇:四二―四五)

天地の主である神の御子が二千年前にこの世に人となってお生まれになった。それは権力をふりまわして、人々に仕えられるためではなかった。むしろ、自ら人類のしもべとなって、私たちが犯した罪のつぐないを十字架の死によって成し遂げるためだった。真の権威者はこの世のそれよりも謙遜であった。

万物の主がここまでへりくだられ、そして言われた。「治める人は仕える人のようでありなさい。」(ルカ二十二:二十六) 公僕は民の生活・生命を左右する権力を行使しなければならぬと恐るべき任務である。地位が高ければ高いほど、恐れおののいて、民に仕える心をもって、その任務を忠実に果たしていただきたい。そこに、公僕の公僕たる矜持がある。そこに創造主の祝福もある。

他人事でなく

しもべの心を持ち、仕えられるよりも仕えることを喜びとする心構えは、公僕にだけ求められるわけではない。私たち一人一人が、仕えられるよりも仕えることを喜びとするならば、家庭も職場も社会も幸福になるであろう。

ある人が夢で地獄見学に行った。地獄の人々の前には大きな食卓があり、山海の珍味があふれんばかり。しかし、彼らは飢えていた。彼らの手に箸がくくられているのだが、その箸は一メートルはあるつかという長い箸なので、ごちそうを食べることができないからである。

また、その人が夢を見て今度は天国の見学に行った。天国の人々の目の前にもごちそうがあり、手には長い箸がくくりつけられている。しかも、彼らはごちそうをパクパク食べて喜んでいて。「次は何が食べたいですか?」と彼らはお互いに聞き合って、長い箸でお互いの口にごちそうを運んでいたのだった。

「愛をもって互いに仕え合いなさい。」

ガラテヤ書五章十三節

## クリスマス・リースを作る 会へどうぞ

早いもので、今年もクリスマスの季節が近づいてきました。今年のアドベント(待降節)は十二月三日に始まります。今年こそあなたのオリジナルの素敵なクリスマス・リースを作って、すばらしいクリスマスに向けて心を備えましょう。

日時:十一月二十五日午後2時

会場:松原湖高原教会牧師館

持ち物:ハサミ、ペンチ、好みの材料(材料は用意していますが、ご自分の好みの材料をお持ちになってもOK)

費用:千円(材料・道具・茶菓代)

# 信仰の二段論法

イエスがカペナウムにはいられると、ひとりの百人隊長がみもとに来て、懇願して言った、「主よ。私のしもべが中風病みで、家に寝ていて、ひどく苦しんでおります。」「イエスは彼に言われた。「行って、直してあげよう。」しかし、百人隊長は答えて言った。「主よ。あなたに私の屋根の下まで来ていただく資格は、私にはありません。ただ、おことばをいただかせてください。そうすれば、私のしもべは直りますから。」と申しますのは、私も權威の下にある者ですが、私自身の下にも兵士たちがいます、その一人に、『行け』と言えば行きますし、別の者に『乗せ』と言えば来ます。また、しもべに『これをせよ』と言えば、そのとおりにいたします。」

イエスはこれを聞いて驚かれ、ついて来た人たちにこう言われた。「まことに、あなたがたに告げます。わたしはイスラエルのうち

のだれにも、このような信仰を見たことがありません。」マタイ福音書八章

多くの人がイエス様にお会いしたが、イエス様を驚かせるほどの信仰を見せた人は、福音書のなかに一人しかいない。その一人が、このローマの百人隊長だった。

百人隊長の信仰は単純明快・論理的信仰である。私は彼の信仰を二段論法的信仰と呼びたい。三段論法とは、

大前提「すべて人は死ぬ。」

小前提「ところで、太郎は人である。」

結論「したがって、太郎は死ぬ。」

という論法である。もう一例あげよう。「すべて犬はワンとほえる。」「ポチは犬である。」「したがってポチはワンとほえる。」

百人隊長の信仰の内容は、

大前提「すべて權威の下にある者は、權威のことばに従う。」

小前提「しもべの病気は、万有の主であるイエス様の主権の下にある。」

結論「したがって、しもべの病気は主イエスが『去れ』と言えば、立ち去る。」

ということであった。いかにも軍人らしい

信仰ではないか。あるいは、理系的信仰と言ってもよい。

科学者には神を信じる人々が、存外、多い。米国の自然科学者たちのアンケートによれば、その八割が創造主なる神の存在を信じると答えている。彼らの論理は明快である。「すべて秩序あるものには、設計者がいる。ところで、この宇宙・自然・人体には秩序がある。したがって、この宇宙・自然・人体には設計者である神が存在する」ということである。近代物理学の父ニュートンも、二十世紀最大の科学者アインシュタインも創造主が実在することを信じて明言している。

聖書的な信仰とは、不合理な迷信の世界に身を投じることではない。むしろ、屁理屈を捨てて、造られた者として創造主に感謝し、その摂理にしたがつ、人として生きるべきまっとうな道に進むことにほかならない。

「神は人を正しい者に造られたが、人は多くの理屈を捜し求めたのだ。」(伝道者七:二九)

# 愛のむち

「むちを控える者はその子を憎む者である。子を愛する者はつとめてこれを懲らしめる。」  
箴言十三三十四

「え！牧師さんのうちでも体罰をするところがあるんだかい。」と驚かれたことがある。どうやら「なんじの敵を愛せよ」という牧師が子どもに体罰を加えることなどありえない。」と考えられたようである。誤解である。幼児期のしつけのためには、愛のこもった規則的な体罰が必要であることを聖書ははっきりと教えている。

## 三歳児の体罰の必要性

なぜ懲らしめが必要なのか。それは、一つには「悪かさは子どもの心につながれている。懲らしめの杖がこれを断ち切る」か

らである（箴言二三十五）。嘘をつけと教えなくても、子どもは嘘をつくようになる。意地悪をせよと教えなくても、意地悪するようになる。人は生まれながらに罪性がある。だから、幼い日にそれをコントロールできるように小さい頃、しつけをしてやるのが、その子の将来のためなのだ。

体罰が必要なもう一つの理由は、特にしつけに必要な三歳児の頃はことばが十分理解できないため、言われても同じ過ちを繰り返すからである。するとお母さんはガミガミ言う。すると子どももお母さんの不機嫌が伝わり、不機嫌になってまた悪事をする。また母親はガミガミ言う。悪循環。結局、お母さんと子どもの関係が悪くなってしまふ。

もし最初、的確にびしりとたたいてやれば、三歳児は自分のしたことの悪を実感し、泣いて「ごめんなさい」といえる。そうしたら、だっこしてやることだ。

## 安全なむち

体罰は、子どもを傷つけるためではなく子どもを生かすために行なう。だからけがをさせては無意味である。ところが、すべて体罰

は悪であるという現代風の観念に縛られていると、親は三歳児の悪事をジーっと我慢して、ついに我慢しきれなくなって爆発し、最後の手段として体罰をすることが多い。これは最も危険である。頭に来た状態なら決して体罰をしてはいけない。それはしつけにはならず、虐待になってしまう。

「むち」とは安全な体罰を意味する。怒り心頭に発した大人のこぶしでは、子どもは大怪我をする。大きな平手で頬をたたくと鼓膜を破ることもある。お尻を力いっぱい平手で打つと、脊椎を痛めることもある。

しかし、最後の手段でなく、警告後、最初的手段として平静な心で柳のむちで手や足を打つのであれば、矯正のために十分な痛みがありつつけがの心配もない。しかも、たいてい二度目、三度目からはむちを指差すだけですむ。子どもの目をじっと見ながら、両肩の筋肉をぎゅっと握って「いけない！」と言うのもよい。痛いのが安全である。

そして、愛のむちのあと、心から「ごめんなさい」がいえたなら、かならずムギユツと抱っこ。親子の心通じ合う幸せなときとなるだろう。